

## 小さくても持続を・共住で暮らしを・起業で稼ぐ村づくり

### 派遣先の概要

#### 長野県売木村

- 売木村は、愛知・長野・静岡県境に接し長野県の南端にある人口469人、259世帯、移住者が40%近く、元気な高齢者層46%が暮らす村。村の情景は、四方八方、峠に囲まれた農山村)。
- 行政職員数31名、地域おこし協力隊8名、集落支援員9名、移住者による起業数20件。

#### 村の特色

- ・山村留学(40年余の継続)
- ・農業(米、トウモロコシ等)
- ・盆地、里山、日照時間、寒暖
- ・名古屋市、浜松市から120分  
飯田市から60分
- ・農村観光(スポーツ、農体験等)
- ・R6年度一般会計予算  
1,359,340千円
- ・長野県では2番目の小規模町村
- ・愛知長野県境を跨ぐ協議会を組織



#### ❖ 派遣先の仕事

- ※非常勤での特任アドバイザー、1ヶ月10回の勤務。
- ※売木村役場内に愛知大学三遠南信地域連携研究センターうるぎ分室を開設をしている。
- ※村の特認事業(4事業)の試行に携わる。
- ※派遣期間は、令和4年度～6年度

### 派遣先が抱える問題意識

#### ○売木村の地域課題

- ①人の流動化、②遊休農地・非居住家の出現、③稼ぐ仕事・起業化、④集落(組)の共住・近助の仕組み、⑤小規模自治体の持続、⑥地域住民の価値

#### ○試行事業

- 事業① 売木村移住・共住支援
- 事業② 集落の教え・うるぎ読本づくり
- 事業③ 農と食と健康の観光創発
- 事業④ 特産品の開発

#### 〈アウトプット〉



### 売木村での取組状況と成果

#### 事業予算があった

- 地方創生人材支援での人材派遣期間は、令和4年度～6年度。
- 初年度から提案した「集落の持続可能な手立て創発事業」予算を組んでいただいた。
- 事業予算は、各年度で4,500千円であり、予算執行の裁量が得られた。

#### 活動は地域の人と

- 地域の人材(現住者+移住者)と外部人材の参加で事業試行が出来た。
- 外部人材は、地域おこし協力隊、愛知大学生、民間企業人等であった。

#### 期待効果はこれから

- 地域の人に教えを乞い、外部の人材を活用して共創することの実体験の場(機会)をつくれたこと。
- 活動は、地域の中での傍観者を自分事として働くプレイヤーを生むこと。



売木村は、移住者が40%近くが暮らしているが外部人材から地域人材へと転身、共住している方々でもある。地域づくりを担う人材は官民間問わず公共的な人材でもある。こうした人材の出現を支援することも「地方創生人材支援制度」で人材派遣者の仕事であると思う。その手立てとして、共に創る事業の試行に地域の人を取り込んだ。事業の効果等の評価は、今後の判断に委ねたい。

「共住施策」は、村独自の施策であり移住者、村現住者が地域(集落)で共に住み、支え合う(近助)の仕組みをつくり集落を持続させる施策である。

〈令和6年度の取組から〉

紹介: 移住された3名の方の共住行動と共通していること

- ①居住地選択には事前に村に足を多く運び移住を決めていること。
- ②居住宅は、空き家の賃貸取得、空き家買取、新築等で「持ち家」であること。
- ③自分が持つスキル、キャリア、自己資金により村で起業していること。

 地域おこし協力隊・玉川綾香さんの取組

- ・令和6年2月東京都から移住
- ・夫婦で「玉川農園」起業 耕作農地1.5ha
- ・栽培は、米、トウモロコシ、みょうが、伝統野菜等
- ・居住宅は、空き家を賃貸取得
- ・展開事業は、農と食、農と教育、農と福祉、農と観光の事業創発
  - ※愛知大学との連携で集落の遊休農地復活プロジェクト継続
  - ※うるぎむら農業新聞の発行
  - ※リトリート・ツーリズム事業の試行
- ❖ 令和6年度売木村が採用した地域おこし協力隊は8名
- ❖ 協力隊のOB総数36人、うち16人が村で共住

The collage features several articles and photos:

- 農で売木村内を繋ぎたい**: An article about connecting the village through agriculture, featuring photos of a tractor and a person working in a field.
- 旭 売木小学校農業指導**: A report on agricultural guidance at Ukiyama Elementary School, showing children in a field.
- 田んぼ 畦塗り**: A photo of a person working in a paddy field.
- 田植え**: A photo of people planting rice seedlings.
- 害虫対策**: An article discussing pest control measures.
- 売木村の伝統野菜 ムラサキモ**: An article about the traditional vegetable 'Murasaki-mo'.
- GW 道の駅**: A photo of the roadside station during Golden Week.
- 春色感謝祭**: A photo of a spring festival.
- 長下**: A photo of a traditional building.
- アグリかなだ**: An article about agricultural products.

## 🏠 パン職人ミショー・フィリップさんの取組

- 三重県津市から令和6年2月に移住した
- 売木村道の駅内にパン工房 (La Michette) を開店(5月)
- 遊休の公共施設・設備等を再利用した
- 居住宅は、遊休公営住宅を賃貸している
- 職人技能により地域に新たなしごと食を創り出した
- パン工房の開業資金は自己資金、村の支援は、道の駅施設・設備の使用料を安価とした

✳️ 売木村でのパン、菓子の製造には、愛知大学の学生が提案したレシピとパン職人が試作の協働作業を行った



## 🍀 クローバの家・水谷紘子さんの取組

- 愛知県名古屋市から移住、売木村岩倉地区に土地を取得、令和7年2月に生活舎クローバーの家を新築
- 不登校や発達障害の家庭教師として、「学習さぽーとクローバーの会」を主宰
- 事業(ハード、ソフト)の立ち上げには自己資金投入、集落が支援したのは、名古屋と売木を行き来きの「縁」と「土地」の提供
- ✳️ 売木村は、40年余にわたり山村留学を受け入れている実績がある。農山村地域での環境を活用した学び、教育の場を提供している。

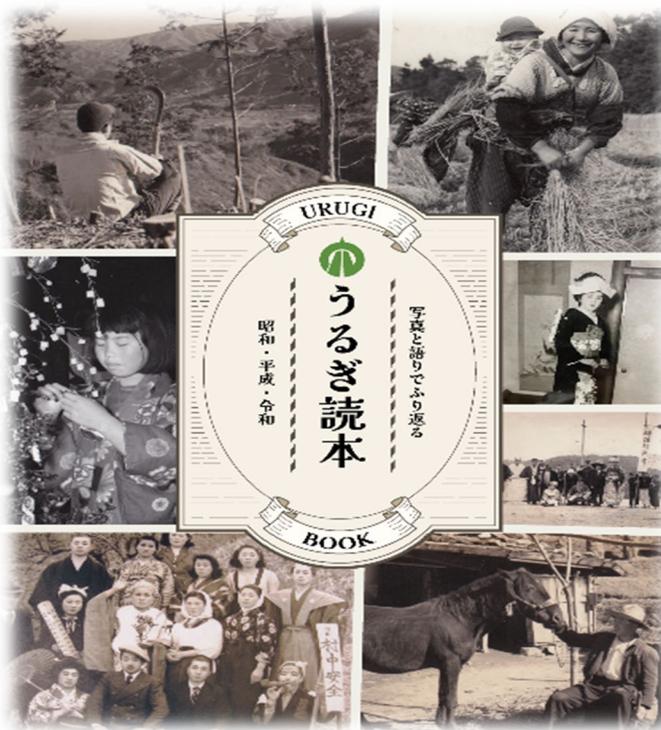


令和7年3月から1名を受入

建築工務店の大工さんも移住者

# 取り組み内容 事業② うるぎ読本づくり

- ▶ 村の暮らし、生活文化、村人のライフヒストリー、地域社会の記憶・教えを記録して残し後世へ伝える手立てとして『集落の教え・うるぎ読本づくり』事業を試行した。事業の実施期間は、令和5年度～6年度
- ▶ 売木村の7地区(7集落)の高年齢者15名から「聴き書き調査(オーラル・ヒストリー)」。地域の埋もれている史料や写真・資料提供に関わった方は50人余
- ▶ 聴き書き調査、取材には、愛知大学地域政策学部岩崎ゼミ生18名、愛知大学三遠南信地域連携研究センター・うるぎ分室、売木村地域おこし協力隊OBが起業したSUTDIO HALUが担当
- ▶ 読本制作監修、編集には、売木村副村長、愛知大学教員、売木村7集落共住推進員が担当
- ▶ アウトプット 事業費1,300千円/『うるぎ読本・800部』/村259世帯に届ける



牛耕(昭和30年頃 提供:小野田 昭義)

伝統的な暮らしを一言で表せば、自給自足だったといえるでしょう。多くが農林業に関わっていた売木村民は、田んぼや畑、林業や養蚕、炭焼き、畜産などをうまく組み合わせ、時代の変化に対応しながら暮らしていました。

いろいろな組み合わせ方がありました。たとえば、南地区の後藤勝郎さん(昭和七年生)のお宅では、昭和三十七年頃に乳牛を飼いはじめましたが、その前の暮らしはこうでした。

## 自給自足

## 伝統的な暮らし



味噌づくり(昭和40年頃 『ふるさと売木村の博物館』より)

「乳牛を飼うまで、うちの現金収入は炭焼き、食べ物ほとんど自給自足みたいなもので、米作って野菜作って、魚や肉なんかはたまに食べたって感じかな。ウサギを飼って肉を食べたり、ヤギを飼って乳を飲んだりした。村の中心にあったお店で魚や肉を買った。しょっぱい塩をなめるようなイワシとかサンマを食べた。川魚も食べたな。」



桑を運ぶ (昭和38年頃 『ふるさと売木村の博物館』より)



養蚕の様子(昭和26年 『ふるさと売木村の博物館』より)

勝郎さんのお宅では、特に養蚕はしなかったそうです。養蚕の最盛期は昭和初期、戦後のピークは昭和三十一年でした。稚蚕の飼育に毎朝三〜五時に起床して世話をする様子が『村誌(下)』には記録されています。

## 背景

売木村長下地区で起業した「(株)アグリかなだ」、「(株)ポレポレキャンプ場」、「地域おこし協力隊 玉川農園」の三者による、農と食、森林と健康、地域環境を組み合わせるリトリート・ツーリズムの創発活動と事業を試行した。

## 事業の展開

- ・愛知大学地域政策学部岩崎ゼミと売木村の3者が相乗り合同ゼミを開催(オンライン)。
- ・売木村現地の長下地区で合同ゼミを開催(3日間)。リトリート体験の素材の洗い出し(モニター調査)を行った。「畑での収穫作業」「森林内でのキャンプ」「地元産の食材を使った料理」「集落歩き」「温泉浴」「地域を学ぶワークショップ」「環境資源としての森林空間体感」「事業の取組態勢」の7視点でのモニターを行った。
- ・長下地区の遊休農地の実態調査と活用提案を愛知大学地域政策学部岩崎ゼミが行った。
- ・子どもたちによるワークキャンプ(2泊3日)の試行。

## 成果

- ※中山間地農業、農山村の副業的な仕事として、ツーリズム創発の兆しが出来たこと
- ※「アグリかなだ」は地域の人による起業、「ポレポレキャンプ場」「玉川農園」は移住者による起業であり、新たな事業体・雇用が生まれている。
- ※長下地区の遊休農地(棚田)を活用して、令和7年度で愛知大学地域政策学部岩崎ゼミが、10aの田んぼで米作りをすることになった。
- ※(株)アグリかなだ、(株)ポレポレキャンプ場さんを含む4名の事業者が、村長へ「DMO、農村RMO創設」の要望を行った。



玉川農園収穫作業



耕作放棄地利用  
ポレポレキャンプ場

〈課題〉

地元産の食材、原材を使った特産品(土産品)の開発。地域人材と外部人材で共に創り出すこと。

〈人材投入〉

- ・売木村からの参加は、農家、地域おこし協力隊、売木村役場。
- ・外部人材の参加は愛知大学キャリア支援センター(学部学生を含む)、三重県津市在住のフランス人のパン職人(ブーランジェ)。

〈展開〉

- ・令和5年度ではレシピの提案と試作を繰り返したが村内での商品化には至らなかった
- ・令和6年2月、三重県津市からパン職人が村に移住、パン工房(ラ・ミシェット)を開店。
- ・愛知大学キャリア支援センター(学部学生を含む)が新たなレシピ提案、パン工房とお土産品開発(パン部門、土産部門)の試作に取組
- ・令和6年11月道の駅イベント「秋色感謝祭」にて4品を愛大生の店でテスト販売
- ・4品は、『切り株クッキー』『こまどりサンド』『野沢菜クッキー』『ヤギチーズクッキー』
- 販売単価は200円、開店3時間で完売

〈成果〉

- ・テスト販売品とならなかった「ふわふわパンちぎりパン」については、パン工房(ラ・ミシェット)で令和7年春から販売が予定された。



中日新聞記事 令和6年9月19日



売木村土産品開発に関しては、令和7年度においてもパン工房(ラ・ミシェット)と愛知大学生との協働事業として取り組む予定

### 《派遣者の対応》

- 売木村への派遣期間は、令和4年4月から令和7年3月の3年間で、非常勤の特任アドバイザーとして1か月10回の業務に携わった。派遣元は、愛知大学三遠南信地域連携研究センターである。
- 売木村と愛知大学は、2016年に連携協力協定を締結し、2017年に売木村役場内に愛知大学三遠南信地域連携研究センター・うるぎ分室を開設(期限付)し担当の教員、研究員を配置している。
- 大学の貢献事業・連携事業として、売木村の地域づくりに関わらせていただいた。

### 《派遣現場体験から》

- 派遣当初から提案した事業の予算を確保していただき、活動、事業の試行が出来たこと
- 人材支援の狙い所であった地域の人(現住者、移住者)との関わりで試行事業がて来たこと
- 地域創生の組み合わせである「地域・地区」×「ひと(共住者)」×「なりわい(しごと)」のk兆しをつくれたこと
- 小規模自治体の売木村行政職員は31名であり一人が多重業務をこなしている。このことから試行事業予算執行の裁量もいただけたこと
- 試行した事業は、事業継続に繋がることではなく、事業おこしの手引的な役割も成したと思う
- 地域創生には、村にあるものは使う、無いもの・ことは借りてみる。それでも必要なら創る。こんな智恵を現場で学んだ気がする。

## 今後の展開

小規模自治体の売木村の課題は、いかに村を持続させていくかであり、強かに、しなやかに、全方位で戦略を練っていただきたい。令和7年度において、地方創生総合戦略・第3期売木版の改訂があると思うので、今一度、村の方向と近未来のビジョンを確かめ、村・地域創生を進めていただきたい。